

10

1926年の自然療養社による 小酒井不木『闘病術』批判について

渡部 幹夫

順天堂大学

日本の近代における結核の蔓延に対して公的対策は貧弱であった。公的な組織としての日本結核予防協会の設立が1913年、結核予防法公布が1919年、日本結核病学会発足が1923年、保健所法公布が1937年、厚生省設置が1938年、結核予防会設立が1939年である。結核の治療が困難であった時代に設立され、猖獗を極めた日本の結核に対峙した民間会社組織として自然療法社がある。自然療法社は原栄（1879～1942）の『通俗肺病予防療養教則』を規範として1923年に田辺一雄（1891～1965）らにより小田原に創設され、1965年の解散まで結核療養の民間結社として活動した。原栄（1879～1942）は1904年京都帝国大学卒業1909～1911年欧州私費留学、結核予防施設、療養施設見学を経て帰国1912年『通俗肺病予防療養教則』の初版を刊行、同年大阪にて開業した。同書は改訂重版をつづけた療養書である。

小酒井不木（光次）（1890～1929）は大正末昭和初期の日本探偵小説界の草分けとして現在も評価されているが、東北帝国大学教授に任ぜられた生理学・血清学者である。小酒井の『私の病歴』によれば、1914年東京帝国大学卒業翌年発病、半年の療養で改善、1916年肋膜炎で1か月病臥、1917年東北帝大助教授、米国留学、1918年ニューヨークでインフルエンザ罹患その後肋膜炎発症回復後、1919年渡英研究生活、1920年ブライトンにて療養、英国医学史研究と探偵小説を愛読した。同年パリに移動後咯血、療養をしながら1920年11月帰国東北帝国大学教授となる。1921年名古屋にてインフルエンザ肺炎から危篤となるも回復、その後『学者気質』にて文筆業をはじめ。咯血や血痰はあるもののきわめて多作の流行作家、変格作家として多数の探偵小説、SF小説、随筆がある。1926年『闘病術』を発表し、当時の結核療養の基本とされていた療養法に対して、精神的療法を主張するとともに、当時の結核医療批判をしている。1926年に出版された『闘病術』は結核を患ったのち、流行作家となった医学者の逆説的結核療養書として版を重ねた。

自然療養社を結社した田辺一雄は旧制中学3年時に肋膜炎で1か月休学、その後電鉄会社の技師として現場にて働いたが、1919年インフルエンザ罹患、体調の不良が続き1920年の大咯血以後、原栄の『肺病予防療養教則』による大気安静療法を主とする療養に専念。1923年自然療法社を創立、月刊『療養生活』の発行を始める。代理部を開設、療養物品（主に静臥椅子など）の通信販売業も行った。事業者として結核療養ホームのいくつかを運営した。1925年には結核療養回復者の会として復十字会を発会した。田辺は1926年『療養生活』にて「安静に精進せよ」として小酒井不木『闘病術』を批判し、その後も同誌は瞞着療法、新興宗教批判とともに闘病術批判の立場を崩していない。1931年にトルドー祭を開いている。1941年軍事保護院嘱託、1944年日本医療団嘱託を経て第二次大戦後の結核減少を体験して1965年に没し、自然療法社も閉じられたが、復十字会は和達清夫（1902～1995 地球物理学者・文化勲章受章者）が会長として存続し、1982年に『療養者のつづる日本の肺病』が結核予防会から出版されている。

小酒井は1929年に急性肺炎で急逝した。『中外医事新報』にも4編の論文、医学史論評が残る。医学論文よりも、多くの探偵小説と『人工心臓』や心臓移植にも関わると考えられる『恋愛曲線』などSF小説があり現代の評価に耐えうる作品を残した。

大正末期から昭和の初期は日本の戦間期であり、ラジオ放送が開始されるなどモダニズムの時代とされるが、関東大震災、普通選挙法公布等、社会的には安定せず、世界恐慌に向かう激変の時代であろう。闘病とは小酒井の造語という研究もあり、自然安静療養をとりえた者と、闘病せざるを得なかった、またはそれを選んだ者の結果としての違いは明らかであろうが、『闘病術』が共感を以て受け入れられた風土は広く、それに反対する議論が医学界以外から起こっていることは興味深い。